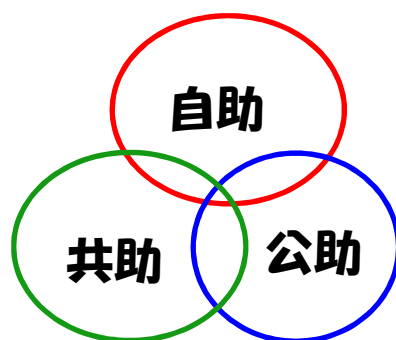


安城市校区別地震防災カルテ

学区：明和小学校区



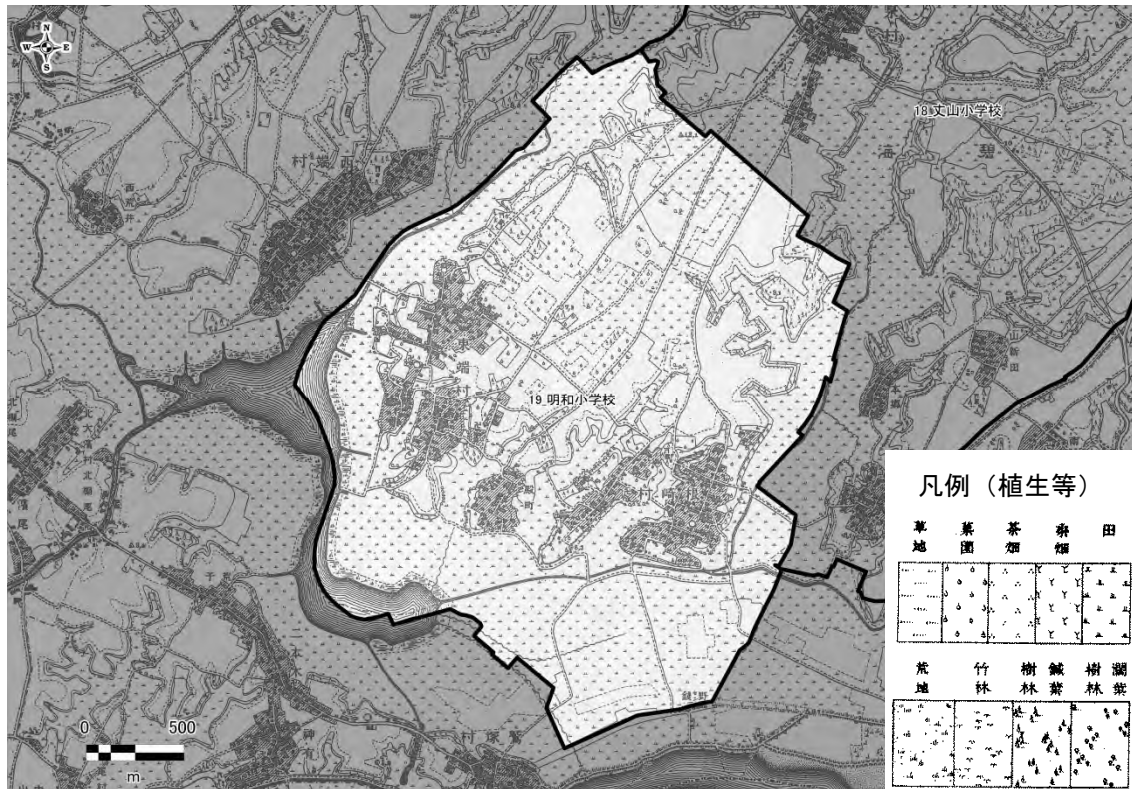
自分たちが住んでいる地区の状況や被害想定、防災施設を把握し、地震に強いまちづくりを進めていきましょう。

安城市

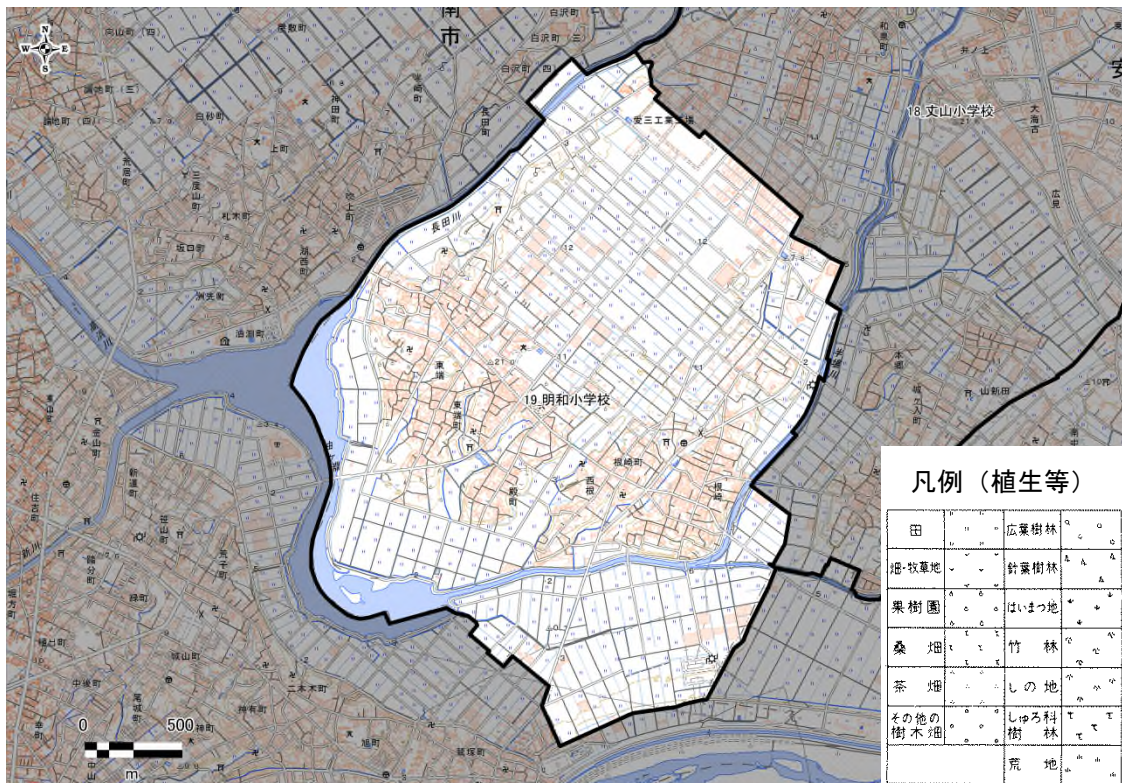
目 次

明和小学校区のむかしと今	1
1. 校区の位置図	2
2. 校区の構成	2
3. 校区の概要	2
4. 被害予測の結果（過去地震最大モデル）	4
5. 被害予測の結果（理論上最大想定モデル）	8
6. 防災関連施設	12
7. 避難所等一覧	13
8. 防災上の課題	13
9. 防災関連施設分布図	14

明和小学校区のおかしと今



むかし (1890 年 (明治 23 年) ごろ) の校区付近の地形

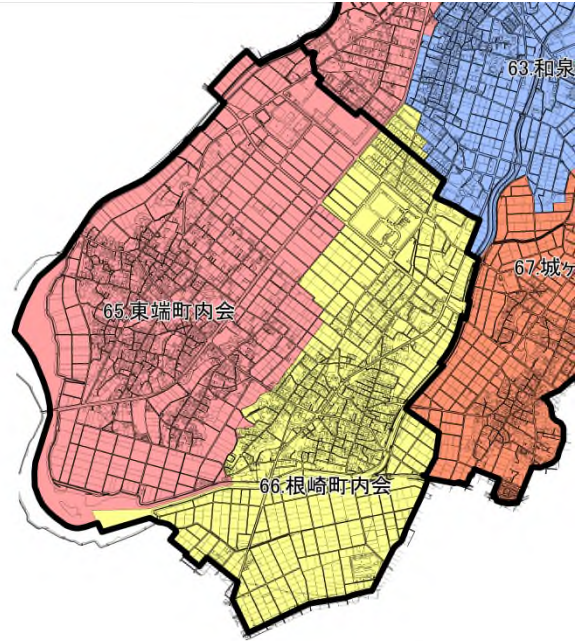


今の校区付近の地形

1. 校区の位置図



校区面積約 6.32km²
(安城市全体の 7.3%)



町内会区分図

2. 校区の構成

東端町〔青ノ山・新井・新子・池田・稲荷・宮下・内浜・大久手・大久戸・貝戸・鐘鋳場・南新田・北山・祈・切間・鴻ノ巣・小山・里・洲鼻・住吉・寺下・天白・殿町・道城・中縄手・中根山・中村・長田・主木・八劔・東稲場・毘沙田・神子塚・南内浜・明和・南山・宮裏・向山・藪崎・山ノ神・山ノ崎・山ノ鼻・蓮台・脇江・井ノ口・白萩・江戸坂・新長田・中田・西新田・東田・丸ノ内・前新田・新稲荷・明祥北・明祥南・明祥東〕、根崎町〔荒子・石谷・壺町掛・内浜・大川・北根・上小久戸・萱野北半場・堤防・五佐池・境目・下小久戸・下渡瀬・砂子・長配・西根・西石谷・西石渕・西大川・西出口・東石谷・東石ヶ入・東石渕・東出口・東家下・伏水屋・傍示木・南荒子・南五佐池・南境目・南根・南半場・南傍示木・石渕・石ヶ入・壺丁掛・新切・新石谷・西新切(市道東端根崎 1 号線以南)・東新切(市道東端根崎 1 号線以南)〕

3. 校区の概要

【位置】明和小学校区は、市の南西部に位置し、碧南市との市境となっている。

【地形】校区南側に油ヶ淵、西側に長田川、南東側に半場川と朝鮮川が流れており、沿岸は低平地となっている。油ヶ淵沿岸は、現在愛知県によって公園整備が進められており、完成後は地盤高も高くなる計画である。

【土地利用】住宅は台地上に立地し、低平地は農地として利用されている。学区北東部には大規模事業所も立地している。

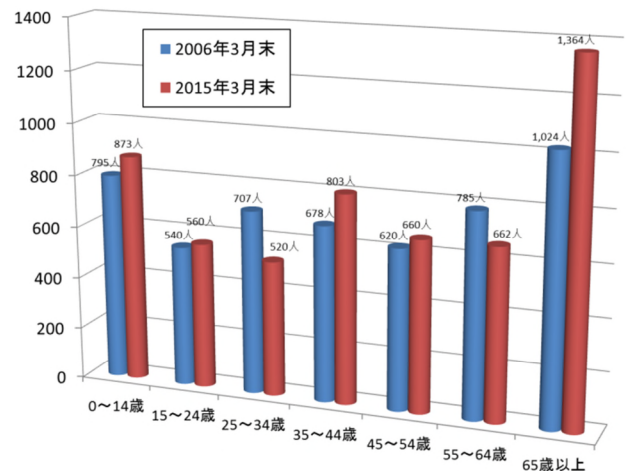
【交通】校区内で県道安城碧南線（45 号線）と県道西尾知多線（46 号線）が交差している。校区内に鉄道はない。

【その他】町内会は、東端町内会、根崎町内会

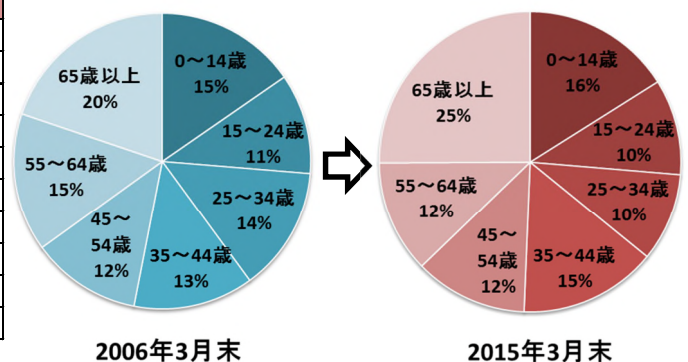
【人口等】(2006年3月末時と2015年3月末時の比較)

人口は増加している。ただし、65歳以上の高齢人口比率も増えている。

2006年3月末	人口	校区内での比率
0～14歳	795人	15%
15～24歳	540人	11%
25～34歳	707人	14%
35～44歳	678人	13%
45～54歳	620人	12%
55～64歳	785人	15%
65歳以上	1,024人	20%
人口(合計)	5,149人	100%
人口密度	815人/km ² (全市 2,013人/km ²)	
世帯数	1,453世帯 (対全市 2.4%)	

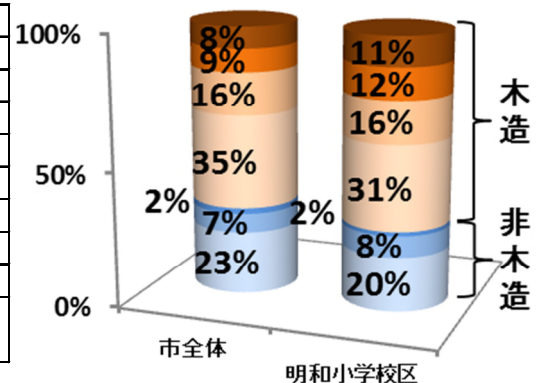


2015年3月末	人口	校区内での比率
0～14歳	873人	16%
15～24歳	560人	10%
25～34歳	520人	10%
35～44歳	803人	15%
45～54歳	660人	12%
55～64歳	662人	12%
65歳以上	1,364人	25%
人口(合計)	5,442人	100%
人口密度	861人/km ² (全市 2,151人/km ²)	
世帯数	1,700世帯 (対全市 2.5%)	



【建物棟数】(2011年12月)

	建物棟数(2011年12月)	校区内での比率
木造	昭和36年以前	328棟 11%
	昭和37～46年	353棟 12%
	昭和47～56年	474棟 16%
	昭和57年以後	947棟 31%
非木造	昭和46年以前	46棟 2%
	昭和47～56年	257棟 8%
	昭和57年以後	611棟 20%
建物棟数(合計)		3,016棟 100%
1km ² 当たりの建物棟数(校区/全市)		校区: 477 / 全市: 699(棟/km ²)

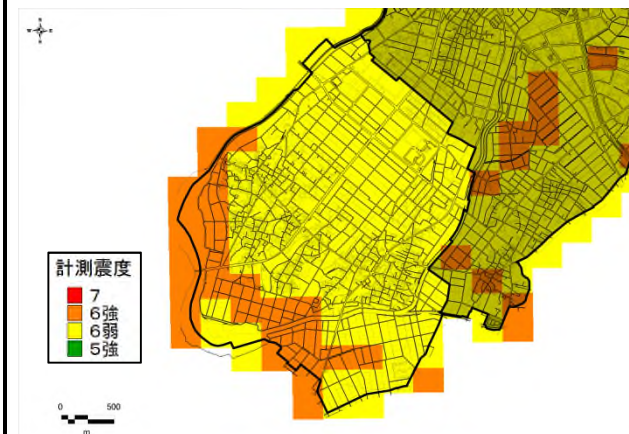


4. 被害予測の結果(過去地震最大モデル)

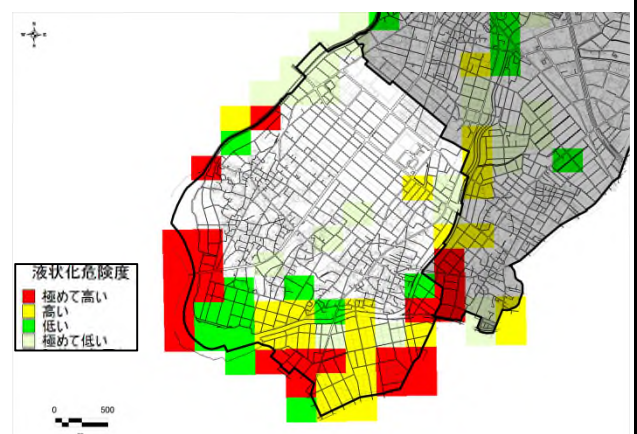
過去地震最大モデルとは：

- ・南海トラフで繰り返し発生している地震・津波のうち、発生したことが明らかで大きいもの(1707年「宝永地震」(M8.6)、1854年「安政東海地震」(M8.4)、1854年「安政南海地震」(M8.4)、1944年「昭和東南海地震」(M7.9)、1946年「昭和南海地震」(M8.0))を重ね合わせたモデル。
- ・本市の地震対策を検討する上で重要な想定とした。

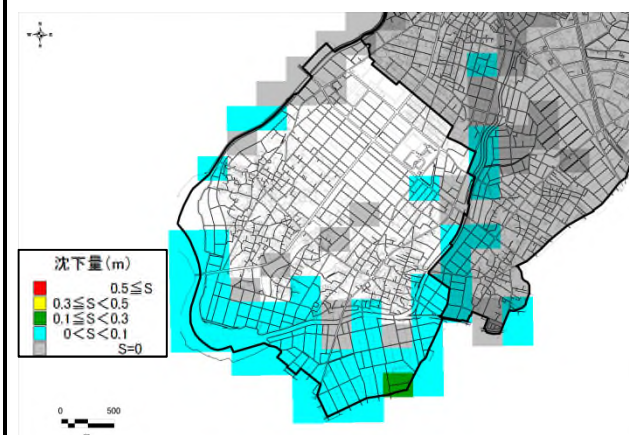
① 想定される地震動の強さ (250m メッシュ)



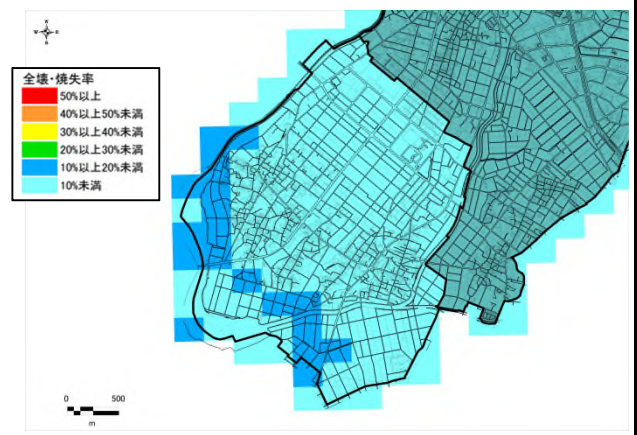
② 液状化の危険性 (250m メッシュ)



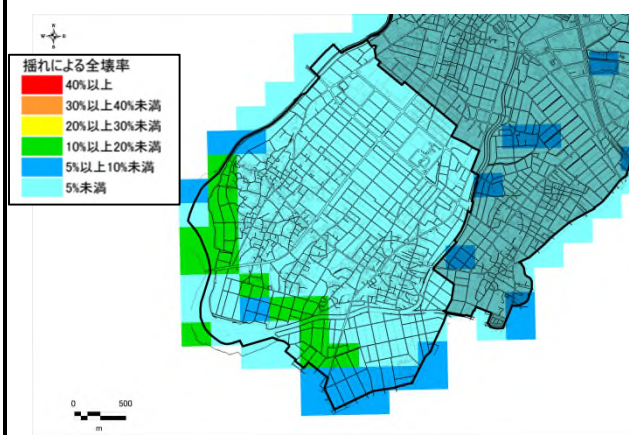
③ 地盤沈下量 (250m メッシュ)



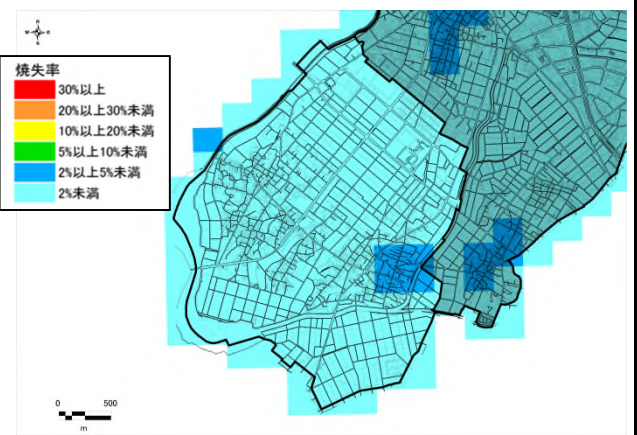
④ 全壊焼失率 (250m メッシュ)



⑤ 揺れ全壊率 (250m メッシュ)



⑥ 焼失率 (250m メッシュ)



4. 被害予測の結果(過去地震最大モデル)

明和小学校区は、震度6弱から一部で震度6強の揺れが想定されている。震度6弱は立っていることが困難になるほどの揺れであり、震度6強になるとはわなないと動くことができない揺れである。建物の耐震補強と家具の固定を進めることが大変重要である。液状化に関しては、油ヶ淵付近の低平地で液状化する危険性が高いと想定される。油ヶ淵周辺や長田川、半田川沿いの低平地は、浸水する可能性もあるため、地震が発生したらただちに水辺から離れ、台地の上など、できるだけ高い所に避難することが望まれる。また、本校区は火災によって焼失する建物も比較的多い。家を離れて避難する際にはブレーカーを切るなどにより、出火を防止することが必要である。

<建物・人的被害の予測>

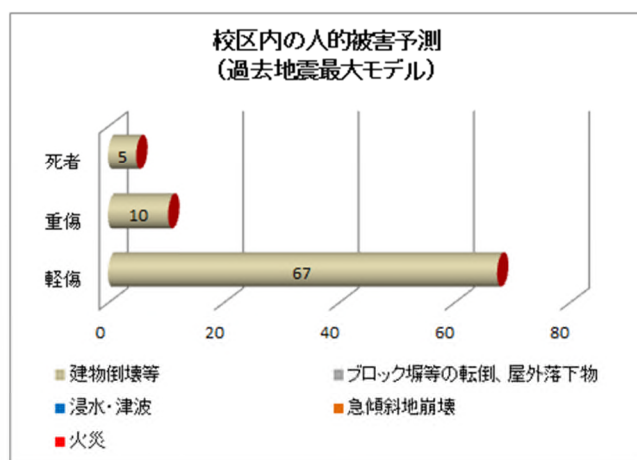
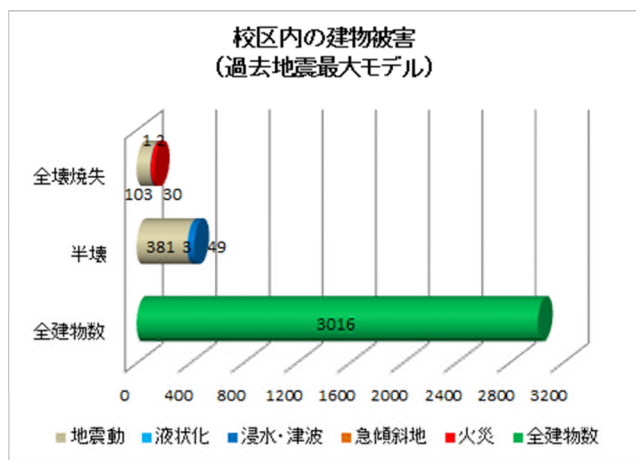
単位:(棟)

建物被害【冬・夕方発災】		
※()内は、校区の建物棟数3,016棟に対する割合		
	全壊・焼失	半壊
地震動	103	381
液状化	1	3
浸水・津波	2	49
急傾斜地	0	0
火災	30	—
建物被害総数	136(4.5%)	433(14.4%)

単位:(人)

人的被害【冬・深夜発災】			
※()内は、校区の深夜人口4,903人に対する割合			
	死者数	重傷者数	軽傷者数
建物倒壊等	5	10	67
(うち屋内転倒物・屋内落下物)	*	(3)	(10)
ブロック塀等の転倒、屋外落下物	*	*	*
浸水・津波	*	*	*
急傾斜地崩壊	0	0	0
火災	*	*	*
被害者数合計	5(0.10%)	10(0.21%)	67(1.38%)

*: わずか



※四捨五入の関係で、合計が必ずしも一致しない場合があります

<ライフライン被害の予測>

ライフライン	被害	95%復旧するのに
上水道	被災直後、約9割が断水	約6週間
下水道	被災1日後、約7割が利用困難	約3週間
電力	被災直後、約9割が停電	約1週間
通信【固定電話】	被災直後、約9割が通話支障	約1週間
通信【携帯電話】	被災1日後、基地局の電波が停止する確率が、最大約8割	約1週間(基地局の復旧)
都市ガス	被災直後、0.3割が供給停止	約2週間
LPガス	被災直後、約1割が機能支障	約1週間

<避難者数の予測>

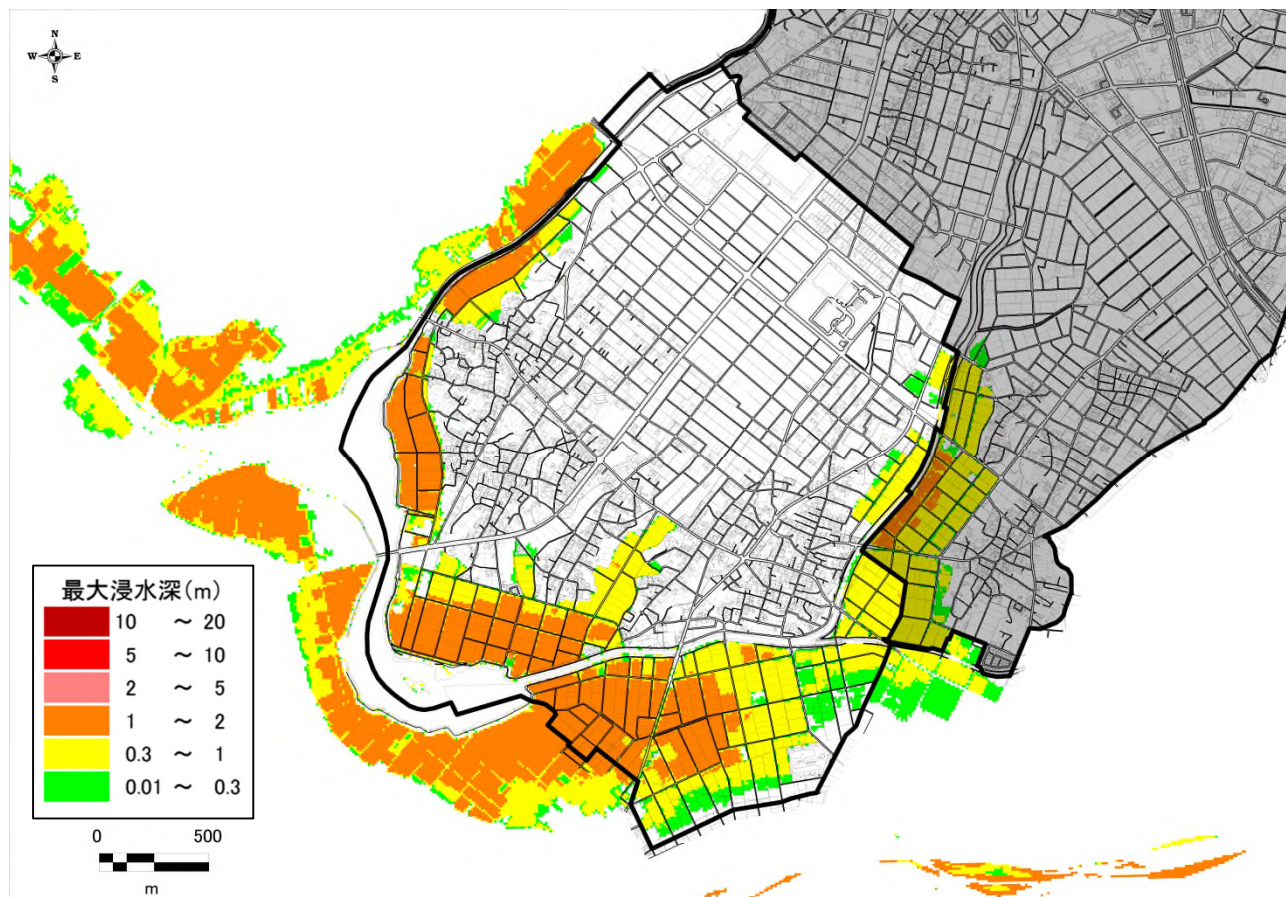
	1日後			1週間後			1ヶ月後		
	避難者数	避難所	避難所外	避難者数	避難所	避難所外	避難者数	避難所	避難所外
明和小学校区	563	350	213	921	497	425	439	132	308
市計	8,271	4,976	3,295	26,649	13,359	13,289	8,142	2,442	5,699

※四捨五入の関係で、合計が必ずしも一致しない場合があります

4. 被害予測の結果(過去地震最大モデル)

浸水想定域及び最大浸水深分布

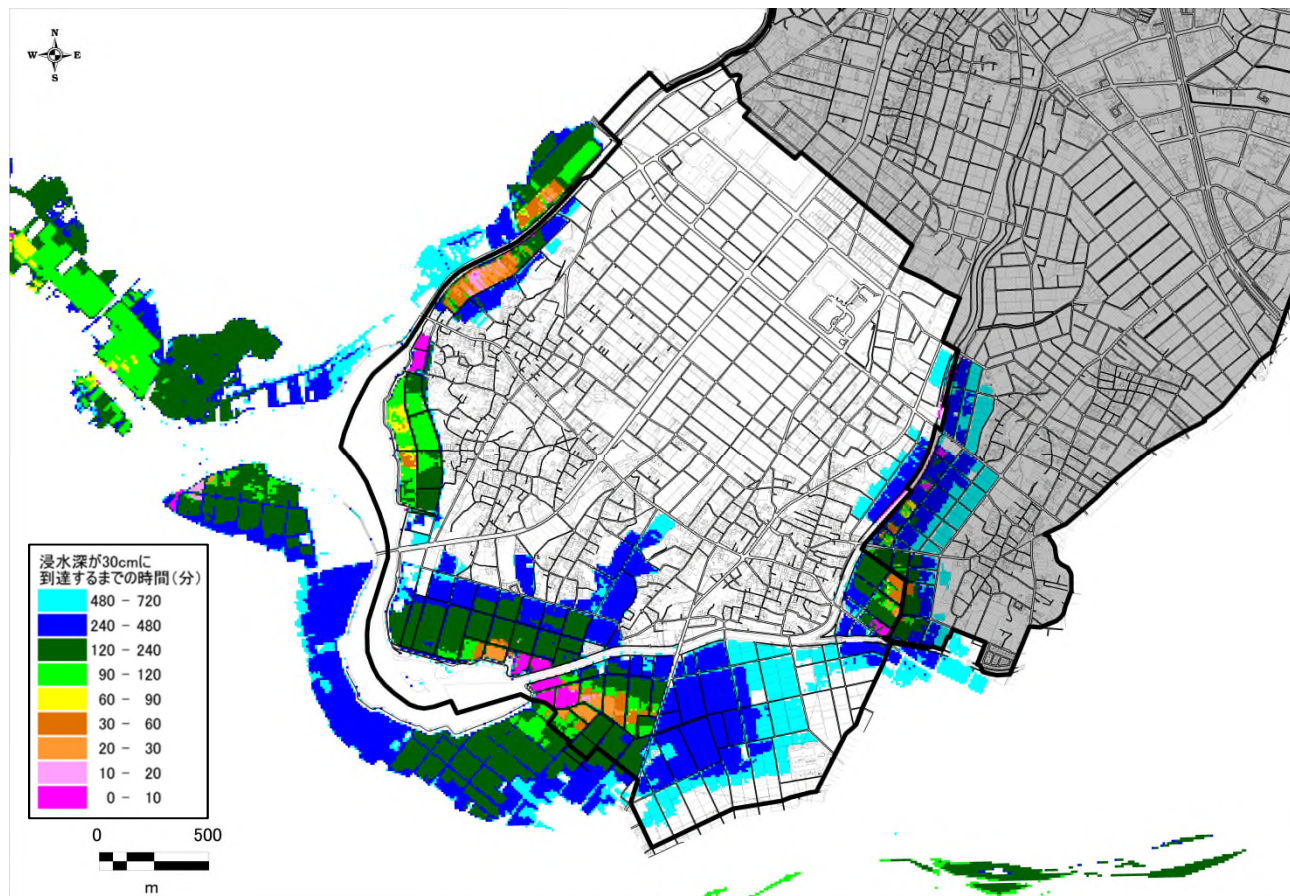
【過去地震最大モデルの場合】(※校区外は色調を暗くしているため、凡例の色と異なる)



4. 被害予測の結果(過去地震最大モデル)

浸水が 30cm に達する時間

【過去地震最大モデルの場合】（※校区外は色調を暗くしているため、凡例の色と異なる）



5. 被害予測の結果(理論上最大想定モデル)

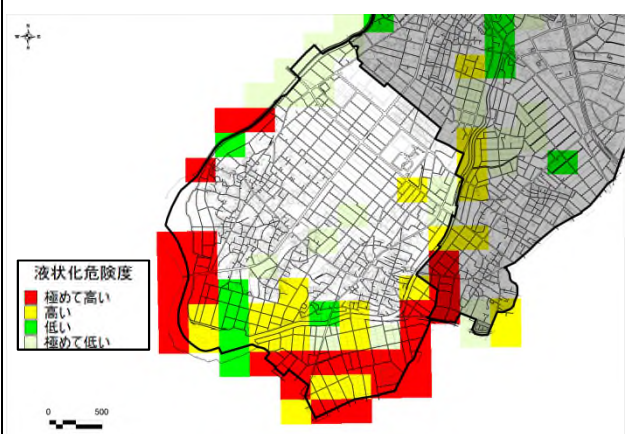
理論上最大想定モデルとは：

- ・南海トラフで発生する恐れのある地震・津波のうち、千年に一度、あるいはそれよりもっと発生頻度が低い地震。発生頻度は極めて低いが、発生すれば甚大な被害をもたらす、あらゆる可能性を考慮した最大クラスの地震。
- ・「命を守る」という観点で想定外をなくすことを念頭に地震対策を講じることが不可欠であることから、あらゆる可能性を考慮して想定した最大クラスの地震・津波モデルとして設定。

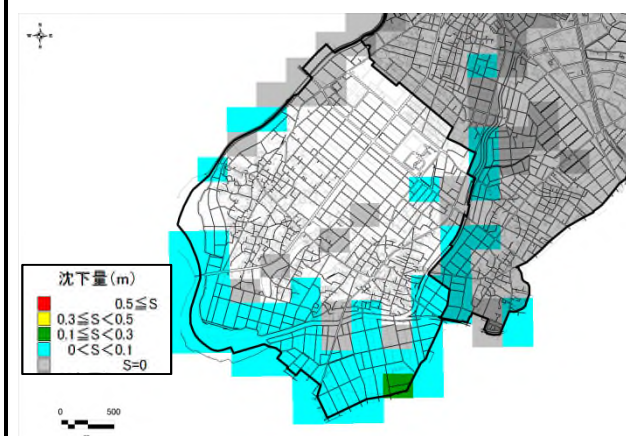
① 想定される地震動の強さ (250m メッシュ)



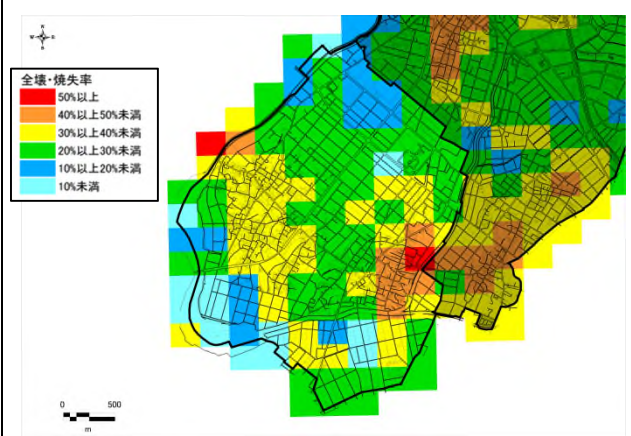
② 液状化の危険性 (250m メッシュ)



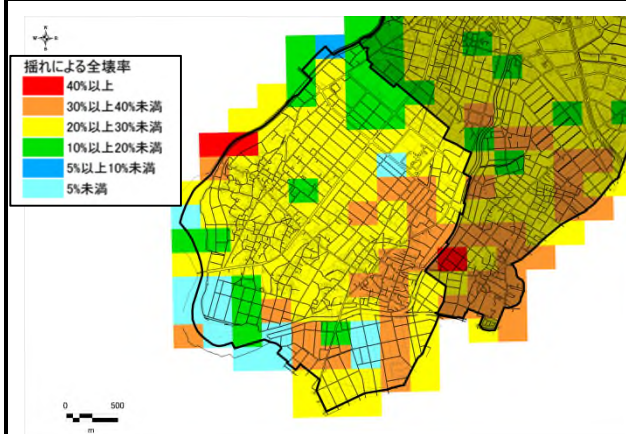
③ 地盤沈下量 (250m メッシュ)



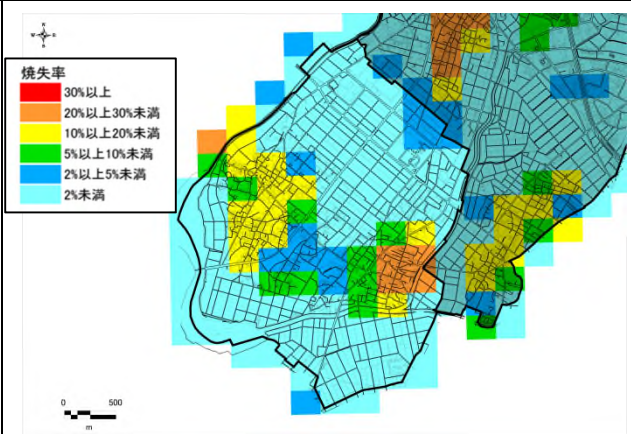
④ 全壊焼失率 (250m メッシュ)



⑤ 揺れ全壊率 (250m メッシュ)



⑥ 焼失率 (250m メッシュ)



5. 被害予測の結果(理論上最大想定モデル)

明和小学校区は、震度 6 強から一部では震度 7 の揺れが想定されている。はわないと動くことができないほどの非常に強い揺れであり、建物の耐震補強と家具の固定を進めることが大変重要である。

液状化に関しては、油ヶ淵付近の低平地で液状化危険度が高くなっている。

油ヶ淵周辺や長田川、半田川沿いの低平地は、浸水する可能性もあるため、地震が発生したらただちに水辺から離れ、台地の上など、できるだけ高い所に避難することが望まれる。

また、本校区は火災によって焼失する建物が多く、人的被害が発生する可能性もある。家を離れて避難する際にはブレーカーを切るなどにより、出火を防止することが必要である。

<建物・人的被害の予測>

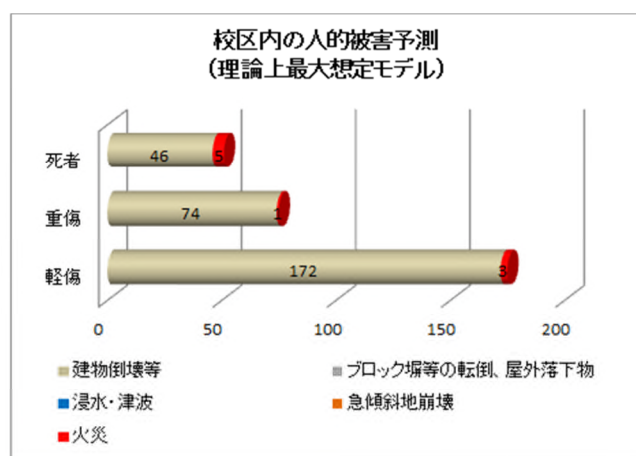
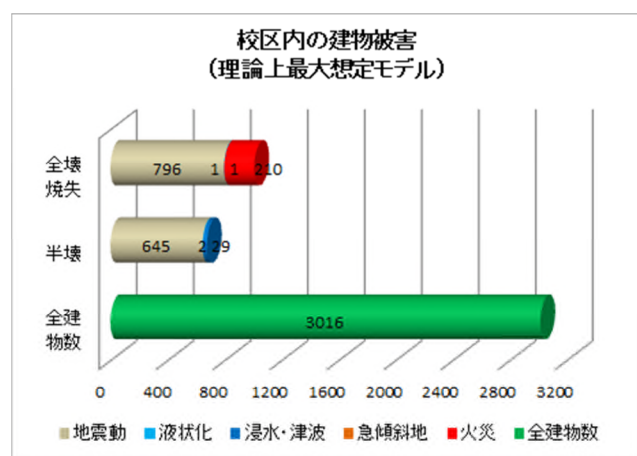
単位: (棟)

建物被害【冬・夕方発災】		
※()内は、校区の建物棟数3,016棟に対する割合		
	全壊・焼失	半壊
地震動	796	645
液状化	1	2
浸水・津波	1	29
急傾斜地	0	0
火災	210	—
建物被害総数	1,008 (33.4%)	677 (22.4%)

単位: (人)

人的被害【冬・深夜発災】			
※()内は、校区の深夜人口4,903人に対する割合			
	死者数	重傷者数	軽傷者数
建物倒壊等	46	74	172
(うち屋内転倒物・屋内落下物)	(3)	(15)	(48)
ブロック塀等の転倒、屋外落下物	*	*	*
浸水・津波	*	*	*
急傾斜地崩壊	0	0	0
火災	5	1	3
被害者数合計	50 (1.03%)	75 (1.53%)	175 (3.57%)

* : わずか

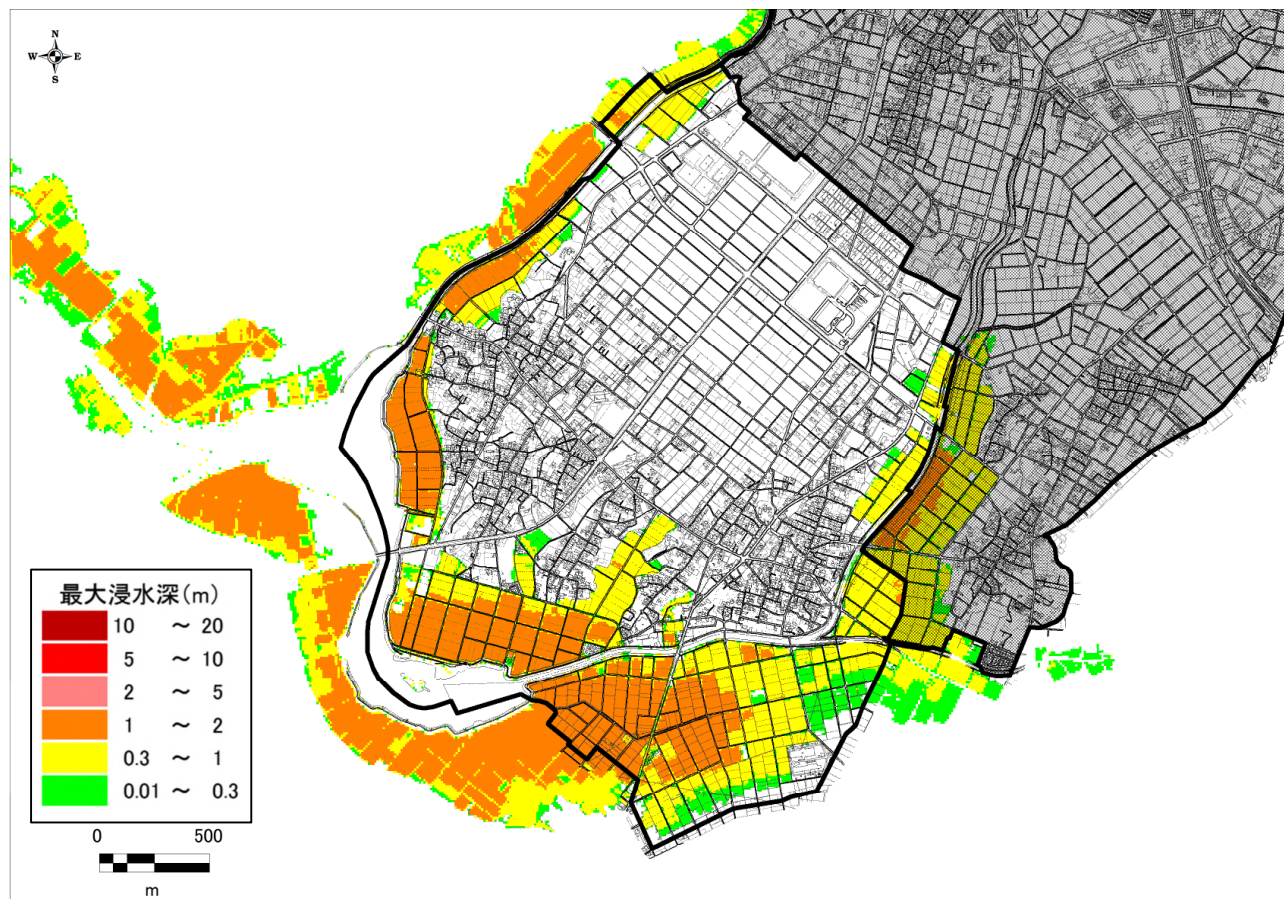


※四捨五入の関係で、合計が必ずしも一致しない場合があります

5. 被害予測の結果(理論上最大想定モデル)

浸水想定域及び最大浸水深分布

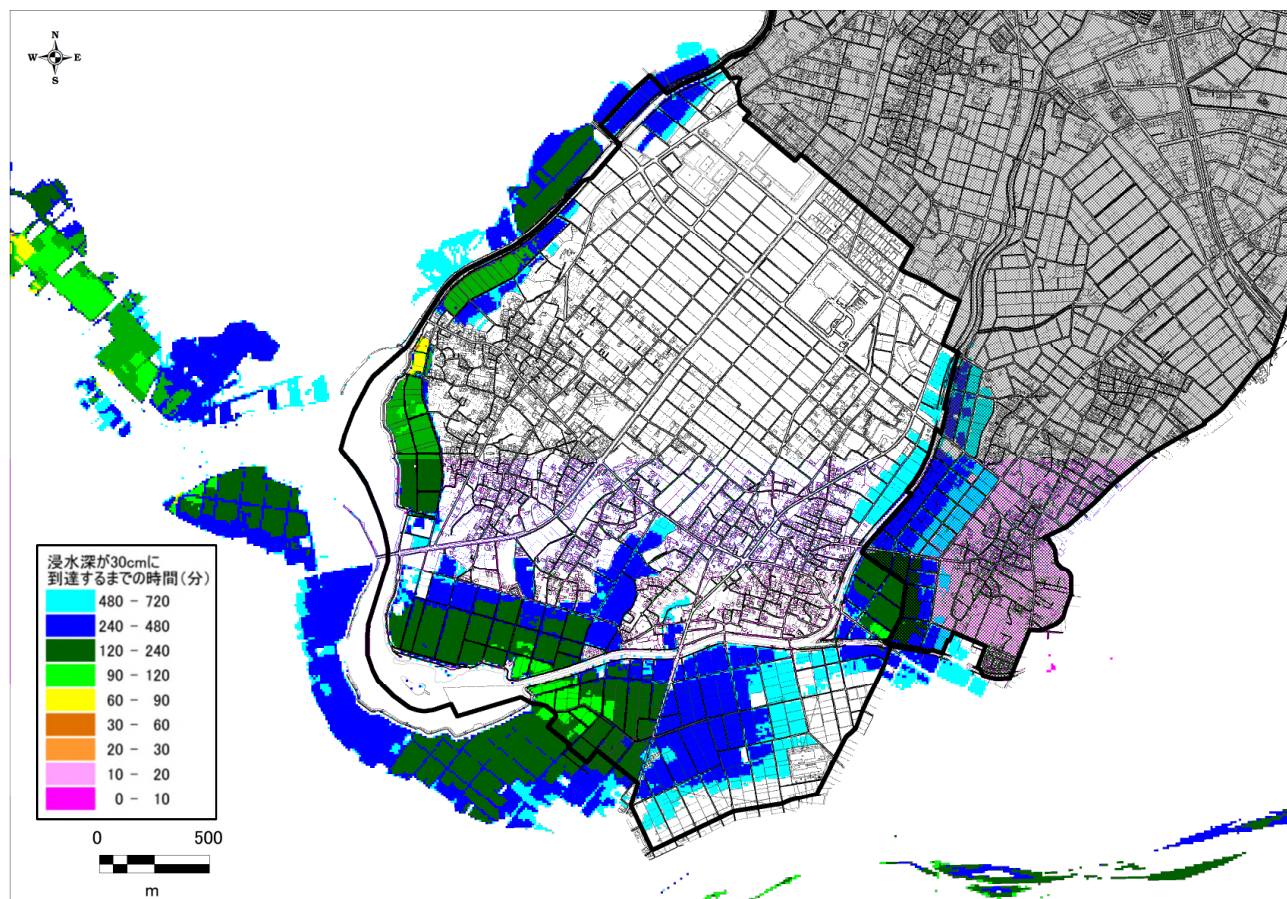
【理論上最大想定モデルの場合】(※校区外は色調を暗くしているため、凡例の色と異なる)



5. 被害予測の結果(理論上最大想定モデル)

浸水が 30cm に達する時間

【理論上最大想定モデルの場合】（※校区外は色調を暗くしているため、凡例の色と異なる）



6. 防災関連施設

防災関連施設	名称
警察署	明祥交番
緊急時ヘリポート可能箇所	—
消防署	—
消防団	東端分団詰所、根崎分団詰所
拠点病院・救急病院・災害医療救護所※	—
自主防災組織	2
防災倉庫・防災資材庫	明和小学校、明祥中学校
応急給水施設	明和小学校、明祥中学校
井戸	16
マンホールトイレ	明祥中学校
学校	明和小学校、明祥中学校
保育園	東端保育園
幼稚園	—
公民館・福祉センター	—

※大規模災害時にのみ開設される救護所

7. 避難所等一覧

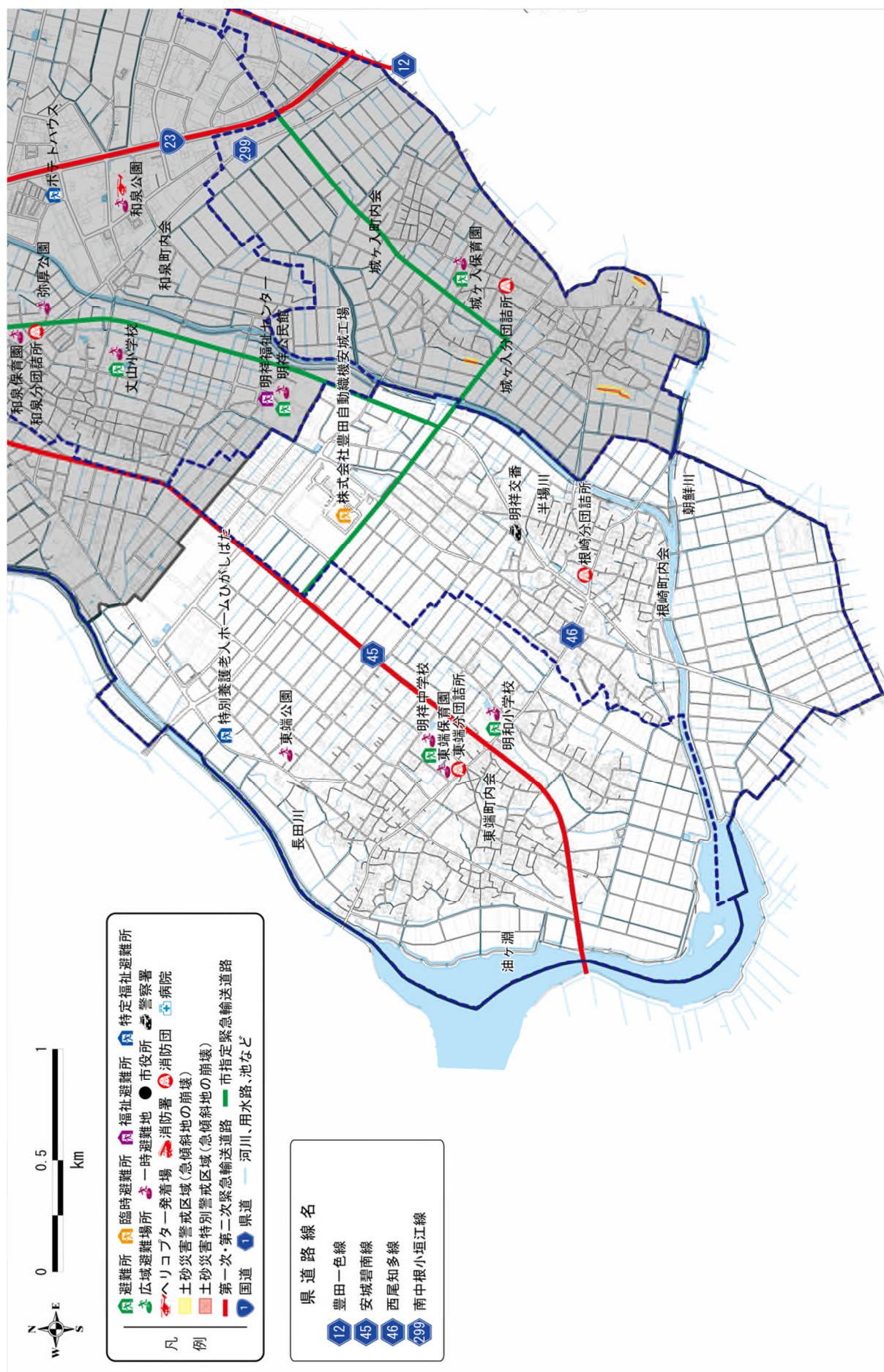
避難所	区分	施設名	電話番号	所在地	収容可能人員[名]
	避難所	明和小学校	41-1244	東端町明和 66	240
		明祥中学校	92-0019	東端町住吉 1-12	800
臨時避難所	区分	施設名	電話番号	所在地	収容可能人員[名]
	臨時※	株式会社豊田自動織機 安城工場	73-2411	根崎町西石谷 201	—
福祉避難所等	区分	施設名	電話番号	所在地	収容可能人数[名]
	福祉特定※	特別養護老人ホーム ひがしばた	73-8211	東端町鴻ノ巣 72-2	—
避難場所等	区分	名称		所在地	面積[㎡]
	一時	東端公園		東端町稲荷 32	11,600
		明和小学校		東端町明和 66	5,000
		明祥中学校		東端町住吉 1-12	11,000
		東端保育園		東端町住吉 61-6	700

※市の依頼に基づき開設される臨時的な避難所

8. 防災上の課題

- ・昭和 56 年以前に建築された木造住宅が多い地区となっており、被害想定では、全壊・焼失、半壊となる建物の割合は、過去地震最大モデルで約 19%、理論上最大想定モデルで約 56%となっている。また、人的被害においても、建物倒壊等による死者数、重傷者数が、過去地震最大モデルで 15 人、理論上最大想定モデルで 120 人となっている。建物被害や人的被害を減少させるためには、昭和 56 年以前に建築された建物の耐震診断や耐震改修により建物の耐震化を進めることが必要である。
- ・木造住宅の割合が多く、火災による人的被害では理論上最大想定モデルで死者数、重傷者数が 6 人となる想定が出ている。火災による人的被害を減らすためには、各家庭での消火器の準備などにより火災を拡大させない対策が必要である。
- ・油ヶ淵周辺や長田川、半田川沿いの低平地や旧河道では、液状化や地盤沈下による建物被害も懸念される。
- ・同じく油ヶ淵周辺や長田川、半田川沿いの低平地では、地震発災時には、堤防が沈下・倒壊し、潮位によっては早期に浸水する可能性がある。津波情報に注意し、早期避難に心がけることが重要である。

9. 防災関連施設分布図



警戒区域等は平成27年3月20日現在のものです。
事後の基礎調査によって、警戒区域等の数および範囲に変更が生じることがあります。

※最新の地形図とは異なる場合があります。

平成28年8月配布
安城市危機管理課